



實驗上の育兒法

醫學博士 瀨川昌耆君講演

▲育兒智識の欠乏 育兒上のお咄しに入る前、特に親々方へ御注意致して置く事がある、先づ第一は育兒に對する智識の欠乏である、一旦女子が嫁入して母親となる前には小兒の育て方を是非一通り研究し置かなければならぬ、近來高等教育を授ける女學校では裁縫料理刺繡等の學課に重きを置

き卒業後夫れが實地に活用する、是れは誠に女子教育上善ばしい進歩であるが是等の女子が家庭を作り小兒を産けた場合になつて尙不自由を感じ差當り當惑する事の出来るのは育兒の智識欠乏である、シテ見ると育兒法は裁縫や料理の家政科と和並んで充分に修養する事は女子教育の實地問題として重きを措かなければなるまい、殊に今は古と違ひ社會は益々複雑で病氣などは昔し日本に名も聞かなかつたものが今では澤山流行するやうな時節だから、完全に哺育するには充分夫れに應ずる丈の智識を蓄へ置かなければならぬ、斯く育兒の智識を備へてすら小兒が産れて實地の場合に當ると修養した丈の智識ではまだナカク物足らず勝手の違うやうな事に澤山出逢うから、若し研究して置かなかつたら何んなに狼狽する事が生ずる

か知れない『子供は構はないでも自然に育つものだ』杯と野放しの獸物ではあるまいしソンの悠氣な事を云つて居ると飛んだ大間違ひを來し、不來にして病氣に陥つたとき、救助の小兒迄も殺して仕舞うやうな不惑な事になるから其の時悔んでもモ一間に合ひませぬ

▲欠點多き育兒書 第二には育兒上の書物に欠點の多い事です、折角育兒の學問を修める場合に欠點のみ多い書物を見ては徒勞に屬する斗りでなく却つて夫れが爲め往々哺育上の弊害を惹起すに至る事がある、昔から古風な育兒衛生書は澤山あるが何分にも昔の智識で今日の育兒衛生には適當せず、又西洋の衛生育兒に關する書物を其儘翻譯されたものもあるが之れとても日本の育兒には適當しない箇所が澤山あるのです、一例を示せば西洋

では産湯をつかはせる時湯の温度が非常に低く書いてあるが之れを直に日本の産湯の温度に應用したら夫れこそ大變、スグに小兒が風邪を惹いて仕舞う、であるから日本人の育兒法は即ち日本で實際の書物でなくてはならぬ、其の書物が欠乏し居るのは實に残念です

▲古來の弊習を打破せよ 第三は古來の習慣になつて居る育兒法を打破しなければ完全なる育兒の改良は出來ない、併し悲しい哉未だ今日では初産の婦人が子を産んでも何うして育て、宜いか無我無中です、夫れ故力と頼み、相談相手とするのは先づ姑さんで、何事も姑さんの經驗談に依らなければならぬが、若し姑が無ければ懇意な老婦人にも聞かなければならぬ、經驗談を聞くのは誠に結構なる事ではあるが、今日進歩せる醫學上から

見たら其の經驗談の中には随分無鐵砲な事實が澤山あつて冷々する様なことがあります夫れを能く鑑別もせず一から十まで經驗談に従ふと飛んだ間違ひを來す故此邊の見分けが肝腎です

▲舊産婆の弊習 第四は妊娠當時に於ける産婆の選擇です、今日では未だ舊式の産婆が澤山開業して居るし、熟練とか年功とか云ふ事を鼻に掛けて新教育を受けた産婆と拮抗しナカ〜勢力を振つて居る、去れども舊式の産婆は唯胎兒を産ませるに止まつて同じ經驗でも學理に基いた根底がない夫れ故何うも産後の肥立ちを誤るとか、分娩期に消毒が行き届かぬとか又初生兒の取扱ひが悪く將來の健康に影響を迫ぼす事が多いとか、サマ〜の弊害が伴はれて來る、是れでは大切なお産に臨んで妊婦が安心して一任する事が出來ないでは

ないか、私の見た處でも舊産婆の取扱方が悪いので完全に産れた小兒を臍帶の落し方や消毒法の届かぬ爲め、遂に治療が届かずムザ〜殺して仕舞つた例が澤山ある、ソコへ往くと新教育を受けた産婆なら一般の産婆學に基いて順序よく適當の手当を施すから例今年齡は若くとも技術の上は確た〜證據があつて舊産婆の熟練よりも年功よりも確かに産前産後の注意取扱ひ并に育兒上の良成績を認める事が出来る、産婆と育兒とは密接の關係を有する事故産婆を撰ぶには僅の事情に纏綿せず斷然新教育を受けた者に重きを置かなければならぬ

▲初生兒の時期 以上の四ヶ條は育兒上の關聯尤も密接である故著しき缺點を擧げて御注意致したのです、小兒の哺育は實に困難なことで充分に實

地經驗を積んでも又次ぎの小兒を育てる時には新しい事實が湧出で首を傾けて考へるやうな場合に接します、デ素より最愛の小兒の事故無事に機嫌よく發育すれば此様愉快なことはなく、夫れと反對に鬱悶がつて泣いて斗り居るとか、兎角病氣勝ちでもあつたら親の身になると其の心配は一通りでありません、扱愈々お約束の育兒談に入りませんが先づ最初に初生兒の取扱方からお咄し致さう、一体小兒時代と云ふのは母親の胎内を出でしより十五六歳迄を云ふので、其の年齢に達する迄の間には色々な身体の變化する時期がある、其の時期によつて小兒を區別されてあるし、従つて取扱法も違つて來るが、今茲に云ふ初生兒とは生れてから二週間迄位の間を申すので、即ち臍帯が落ちて跡の傷が癒ゆる迄を云ふのです、其間は丁度

二週間ばかりの時日を要するのである

▲妊婦の臨月と産科醫 初生兒取扱 上注意の順序として妊婦が既に臨月に近づいたならば必ず熟練なる産科醫に診察を受ける事が尤も必要とする、母胎の胎位が規則正しく發育して所謂普通のお産なら初産と雖も別に危険のあるべき筈はなく、安全に平産する事が出来るけれど萬一胎兒の居る場合等であつたら夫れこそ出産に臨んで轉倒苦惱しなければならぬから爾いふ事の豫防として必ず産前に産科醫を招くが宜い、爾うすれば万々一胎兒が轉倒し居つても夫れは居直りを直しくして愈々お産の時になつても安々と規則通りの出産をすることが出来る胎兒にも決して故障の起るものでない

▲小兒の健康診断 先づ恙なく胎兒が分娩したら産婆が万事の取扱法を心得て拔りなく指圖するの

が當前である併し出生の小兒は是非共小兒科の専門醫を招いて取敢ず身体検査を受ける事が第一の急務である、小兒の体外に顯れたる畸形なら一見して素人にも分る、即ち三ッ口だとか六ッ指だとか云ふ様な事なら直に見分けが付くので専門醫の診斷を乞はなければならぬが、若し爾ういふ不完全な部分が眼に觸ぬと多くは安心して醫師の診察を受せず其儘に過して無病息才な小兒と斷定して仕舞う、是れ大なる心得違ひで此一步を誤りし爲め遂に取返し付かぬ大事を惹起すやうになる、素人が等閑に附し誤解を來し易いのは小兒の体内に潜む先天性の疾患である其内でよく見受ける病氣は梅毒とか、鎖肛とか、心臟病とかで、爲めに小兒は衰弱し親々の眼にも夫れと心付く時に初めて醫師の診察を仰ぐ、此時薄弱なる小兒は往々取返

の付かぬ重患に陥る事がある、斯んな騷をするより分娩當時専門醫の身体検査を受けて置く方が安心して育てられ、若し先天性の疾患があつても速に適當の治療を施す故後の憂ひを未然に防ぐことも出来るのですから、出生の小兒が身体検査を受けるのは妊婦が出産の時産婆を呼ぶのと同じ事に心得なければならぬ

▲育兒の日記 此の身体検査を受ける時には醫師の注意もあらうけれど尙親達の小兒發育上の参考として同時に小兒の体重、身長、及頭部と胸廓の周圍を精密に量り夫を記録し置のが必要である、それから生れた時の状態は何うであつたかと云ふ事も手落ちなく記して置くが宜い、其状態と云ふのは精密な程結構ですが忘れてはならぬ重なる事として出産の状況、体重、身長、頭圍、胸圍身体特

徴、臍帶脱落并に其癩痕結成の時期、營養の方法  
 (母乳、乳媪、生牛乳、煉牛乳固形食物を與へ始め  
 たる時期)并其種類、齒の發生并に脱落の狀況、  
 起立歩行の時期、發語發話の時期、并其欠點其外  
 一切の精神作用就中智識發達の順序より其特種な  
 る點は必ず記すやうに仕なければならぬ、デヒ一  
 日と發育の模様も變化を生じて來るから毎日の事  
 を細大洩さず記し置く時は其の小兒が將來の歴史  
 として有益なる斗りでなく發育上の良否も一目瞭  
 然故、發育不完全なる場合にも夫れを速に發見さ  
 れ、又醫師に相談する時にも夫れが有力なる參考  
 となるから小兒を健全に哺育しやうと思ふなら必  
 ず此日記を怠らず親達の我子に盡す當然の義務と  
 心得なければならぬ

▲初生兒の健康なる特徴(一) 恙なく分娩した初

生兒が健康であるか無いかと云ふ特徴があるが夫  
 が一見して素人に解るやうに説明致さう、先づ充  
 分成熟した初生兒なら第一に泣聲が高い昔の書物  
 に「産聲高く玉の如き男の子を擧た」杯と云事の  
 書てあるが男に限らず女に限らず健全な小兒なら  
 必ず高い聲で泣出すものだ、低い聲で優しい泣き  
 方でもすると「マア此赤さんはお溫和しい事」杯  
 と云ふ、夫れは素人方の誤つたお世辭で、醫師か  
 ら申せば先づ脆弱な小兒とより外思へない、夫れ  
 から第二には皮膚の色を御覽なさい、赤味を帯び  
 て居る、赤子とはよく名を付けたものです、爾う  
 して脂肪筋肉が緊滿して居るのは健康な瑞相の一  
 つである第三は頭髮が房々と密生して居し、第四  
 は手足の爪が勢衰ないで充分に伸びて居る、丈夫  
 な小兒は斯ういふ鹽梅に頭髮から爪に至る迄出產

當時から生々しく居るのである

▲初生兒の健康なる特徴(二) 第五の健康な特徴は体重である、男の子なら二千九百グラム(凡そ我が七百八十三匁)より三千グラム(凡そ我が八百十匁)迄位です、若し之れが女の子なら男よりは目方が少し減じて二千八百グラム(凡そ我が七百五十六匁)内外です、第六は其の序に身長を量つて御覽なさい、男の子なら四十九センチメートル(凡そ我が曲尺一尺六寸二分位)女の子なら四十八センチメートル(凡そ我が曲尺一尺五寸八分位)あつたら充分です男女の目方や身の丈の違ふのは素より自然の理で別に怪むべき所はないが唯以上の如く申したら体重や身長が少ない初生兒は満足に育まいかと懸念するお方もあらうけれど併し之は育たないと云ふ譯は無のです、育て方にさ

へ充分氣を付けて遣れば随分健全に育つから念の爲め申添へて置きます、第七には頭部と胸隔の周圍の長さを量るに初生兒は必ず頭勝ちのものである即ち頭の周圍は三十三センチメートル(凡そ我が曲尺一尺九分位)が健康状態であるが夫れに準じて胸隔の周圍は三十一センチメートル(凡そ我が曲尺一尺二分位)迄位の長さのものである是等は男女共各著しい差は無い女子の方が二三分も短い位です、尙序に申して置くが其の小兒が健全に成育して一年の後半期に及べば頭部と胸隔の周圍の長さは平均するか、左もなくば頭圍より胸圍の方が大きいのが通例である、即ち胸の發育が頭の發育に打ち勝つのである、然るに夫れが反對で一年の後半期より二年に及んでもなほ頭勝ちの儘で居る小兒がある、これは身体虚弱の徴候で身体

のどこにか病があるからよく醫師に托して早く相當の處置を施さねばなりません

▲頭の格好 初生兒が母体を出た當時は頭の形が小兒によつて各異つて居る、通例は丸いものと定つて居るが、稍ともすれば細長い形があるし、又は平たくなつたりして居る、ダガ之れは心配にはならぬ、日を経るに従ひ細長い形も平つたのも次第に圓味が付いて普通の頭形に復するものである

▲顛門と骨の發育 初生兒の頭部を能く檢めて見ると前頭にピク／＼動いて居る處がありませう、之れを顛門と稱へ、俗に「ひよめき」と云ふがピク／＼して居たからとして異状のある譯ではない、未だ此の時期には頭蓋骨が閉ぢないのです、生後一年から二年の間には何時が此骨が閉ぢて仕舞う、

處で二ヶ年経つてもまだ顛門が閉ぢずに以前の儘に開けて居たら、夫れは骨の發育が不充分的な故に速に小兒の専門醫に診察を受けて相當の手當を仕なければならぬ

▲青班なる小兒 生れた時小兒の身体を檢査すると大抵は青班といふ青い色の班紋が臀部、腰部、背肩部等に存するのを見るであらう、此青班は決して西洋の小兒には見ない、黄色人種に限つたものだが小兒の成長するに従ひ何時取れたとは無く自然に消滅して仕舞ひ跡を殘さぬから之れは案じるに及ばぬ

▲西洋の産湯は不適當 是迄順序を立てゝお話し仕た育児上の注意は未だ胎兒の生れ落ちざる其の前に豫め親達の記憶し置かねばならぬ要件であるが妊婦が産氣を催ふして胎兒が母の体内を出ると



ソコで産婆が夫々規則正しく適當の處置をなすので、扱之れからが愈々實地に手を下して保育する大切な時期となるのである、産婆は生兒を取揚げ、臍帶を切つて仕舞うと先づ産湯を行はせるが、其の温度の事に就きお咄し仕て置きたい事がある、夫れは西洋の育兒書等を其儘翻譯した書物の中には日本人の育兒法に不適當な事が澤山記してあつて既に産湯の温度等は全然日本古來の習慣にそむいてゐるやうな低い温度を記載してある、即ち西洋では攝氏三十五度位の産湯を行はせるが、此の位の温度では日向水の少し温かい位のもので、手を其中へ入れて見ると却つて温いと云ふ感じがなく湯とは思へないやうな微温である、西洋人の習慣から考へればこれが適當なる温度であらう、何故ならば西洋では浴法が冷浴、温浴、熱

浴の三種あつて平生一般の温浴を取つて居る、其の温度は三十五六度の處です、爾うして入浴するにも垢を落して身体を清潔にし精神を爽快にするのが目的であるが、斯ういふ習慣を直に日本人に適用致さうと云ても日本には從來日本人に適當なる入浴の習慣があつて俄に之れを打破する事は出来ない、先づ日本人の入浴法は身体を清潔にし精神を爽快ならしむる外に身体を温めると云ふ一種特別の習慣がある、故に三十五六度の日向水のやうな湯へ浴つたら忽ち感冒を惹くから、幾ら微温好きの人でも三十九度以下では良い心持に温まれない、況して熱い湯好きでは四十三四度位を喜ぶ程です

▲適當なる産湯の温度 斯ういふ熱い湯へ浴いり習ちつた日本人の間へ生まれた赤子ではあるし、

且つは日本の家屋は西洋の家屋に比して誠に構造から不完全であるから室内の温度は動ともすると冷却する、此際母の温い体内を出た許りの初生児が西洋で用ゐる三十五六度位の微温な産湯を行はせたなら何うでわらうか、少し手間取つたら忽ち血温(攝氏三十七度)よりも温度が下り、夏向きならまだしもよいが、寒中でいもあつたら赤子の身体は俄に冷却して再び元のやうに温めるには容易でない萬一温めやうでも不充分であつたら生力次第に弱つて取返しのかぬ一大事を醸すに至るであらう、故に日本で初生児に行はせる産湯は夏と冬とを斟酌して攝氏參拾八九度位の温度と定め、大人が其の湯へ手を入れたら丁度心持ちよく温かに感ずる位即ち熱からず、ぬるからずと云ふ度合ひとするが宜い、尙日本人が熱い湯へ浴る事に就

て衛生上矢笠しい説もあるが、私は寧ろ日本人の爲めには熱い湯の方が衛生上の利益ある事と信ずる其の理由は次回にお咄し致さう

貞一の日記(明治卅六年五月)(抜萃)

その母

明治三十八年四月廿四日 佐々木先生來診せられ食物平生の通に復してよろしと、牛乳は明朝より、二〇〇瓦に増すべしとなり。

四月廿五日

体温 朝 卅六度六分 晝 卅七度一分 夕

卅六度

夕食の折、安田さん、箸をもつて、喰べさせようとしたるに、箸をとりあげて、母に渡さんとし、受取らざりしかばひつくりかへりて泣く、